

信 頼

ヘンリー・ジェイムズ
水野尚之 訳

第一章

四月の初旬だった。バーナード・ロングヴィルは冬をローマで過ごしていた。アルプスの向こう側から訴えかけてきたいくつかの人づき合いの義理を意識して、彼は北へ向かった。しかしイタリアの春の魅力には勝てず、彼はそこに留まる口実を作った。シエナ^①では五日過ごした。ほんの二日のつもりだったが、先を行く旅を続けるのは無理だった。ロングヴィルは内省的、思索的な若者であり、これが彼の最初のイタリア旅行だった。それゆえ、彼が途中で道草を食っても、厳しく責められるべきではない。彼はスケッチをするのが好きで、いつも二、三枚絵を描くことにしていた。シエナには古い旅館が二軒あり、どちらもまことにみすばらしく汚かった。ロングヴィルが泊まることにした旅館は暗くあぶなっかしい入り口から入るようになっていたが、その上には看板があり、遠くから見ると、あらゆる希望を捨てるようにというダンテの教えのように旅人には読めたかもしれない。もう一軒の旅館もそれほど離れてはいなかった。そして到着した翌日そこを通りかかったロングヴィルは、二人

の女性がその旅館へ入るのを見た。彼女たちは明らかに彼と同じアングロサクソンの旅行者であり、そのうちの一人は、若く、身ごなしもすばらかった。ロングヴィルにも一人前の、あるいは一人前以上の、女性に対する好奇心があり、この出来事は後悔の念を呼び起こした。あちらの旅館に泊まっていたら、魅力的なつき合いができたかもしれないのに。今の自分の宿には、食事室でひどいタバコを吸う芸術的なドイツ人しかいない。自分の運はいつもこんなものだ、と彼はひとり言を言った。こういうひとり言はロングヴィルの特徴だった。それはその場の気分を表わしていたが、まったく正しいというわけでもなかった。それは特定の場合に受けた鋭い印象の結果だったが、ロングヴィルの人生に幸福な出来事——特に、彼の女性への興味が練習不足で鈍るに任せられていたわけではない出来事——をちりばめてくれた天の配剤に感謝する気持ちに欠けていたのだ。しかしながらトスカナ地方の四月の、明るい静かなここ数日には、彼は満足して時をすごし、自分のまわりの絵ピクチャレスクのような風景のすばらしさを堪能していた。数年前からシエナは、中世から現代人の想像力に与える完璧な贈り物となっていた。廃れた風物を再構成するのを好む人にとって、シエナ以上に興味を惹くイタリアの都市はなかっただろう。これこそが、まじめな文学を愛し、一時期は中世の歴史を訪ねて何度も刺激的な旅行をしたことのあるバーナード・ロングヴィルの趣味だった。友人たちは彼のことを大変賢いと思っていたが、同時に学者ぶらないという点で気安いとも感じていた。実際彼は賢かったが、友人としても優れていたのだ。しかし彼の賢さを本当に計るものさしは、彼が自分をいかにうまく楽しませているかという点にあった。彼は自分の機知との会話にふけり、一人である状態を好んだ。彼は友人たちと話す際にも賢かったが、ことわざにあるように、彼の最良の部分が彼自身の耳のためにならないかどうかは、私には確信がもてない。またこれは友人の理解力に対する冷笑的な軽蔑の念のためではなかった。要するにただ、彼が一人である状態と私が呼んだものが、他のたいいていの人々が与える刺激より

も強い刺激となっているにすぎないのだ。しかしこうした理由で彼が孤独を好んだわけではなかった。その反対に、彼はとても社交的な人間だった。はじめに認めておかなければならないが、彼はいくつかの点で矛盾するように見える性質の持ち主だった。そのことはこの物語が進展する中で、おそらくお分かりいただけるだろう。

シエナの建築や初期のトスカナ地方の芸術、イタリアの町の生活やアペニン山脈の地質学上の特徴について、ロングヴィルはさまざまに思いをめぐらせ瞑想し大いに楽しんだ。あのもう一軒の宿屋に泊まってさえいれば、彼から顔を隠すように薄暗い玄関を通っていくのを見かけたあの美人は、彼との知的な食事をともにしていたかもしれないに。しかし、もし彼女がその気になれば、このような食事のおこぼれのパンなりとも拾えるように思える日が来た。毎朝、朝食後にロングヴィルはシエナの大広場に向かった。そこは馬蹄形の広大な広場であり、銃眼のある宮殿の窓の下で市場が開かれている。宮殿からさがった蛇腹からは、高い真つすぐな塔が、船長の縁なし帽の羽飾りのように軽く伸びている。この広場を彼はぶらぶらと歩き、日に焼けた農民がロバの荷を降ろすのを見たり、一山のニンジンめぐって半時間も値段の掛け合いが行なわれているのを眺めたりした。また、生き生きした瑪瑙のような目をした若い娘が彼にスケッチさせてくれないだろうかと願ったり、時々美しい細い塔が広々とひろがる青い空を背景にくっきりと立つのを見上げるのだった。こうした莊重な黙想をして一週間の大部分を過ごしたあとで、彼はシエナを去る決心をした。ただ彼はスケッチ帳に描いたものに満足したわけではなかった。シエナは実にスケッチのしがいのある街だったが、彼はせつせと描いたわけではなかったのだ。シエナ滞在の最後の朝、広場の雑踏の中に立ってあたりを見回し、ここは絵のように美しいとはいえ画架を立てるには厄介な場所だと思いながら、はじめのころの散歩の途中で偶然見つけた、街の他の場所にある静かな片隅のことをロングヴィルは考えていた。そこは市の城壁に接する寂しい高台の一角であり、三つ四つの時代遅

れの風物が陽光のなかでうたたねをしているように見えた。がらんとした教会の開いた扉の迫持^{アーチ}には、色褪せたフレスコ画が外の空気に晒されていて、そばには物乞いの老婆が三脚の腰掛にすわっていた。小さな高台には、人の胸ほどの高さの磨かれた古い手すり壁があり、そこからは奇妙な悲しげな色彩の丘が望めた。外では、左手に向かって街の壁は外に向かって曲がっていて、ごつごつし色褪せた表情をさらしていた。教会の壁にはなめらかな石のベンチが作りつけてあった。ロングヴィルはそのベンチに一時間も座り、私がその諸要素を示し、高台の手すり壁が前景となるようなちよっとした風景の構図を眺めていた。その光景は画家ならば画題と呼ぶものであり、ロングヴィルは次はきっと画材を持ってこようと思っていた。今朝の彼は宿屋に戻り、画材を用意した。そして彼は、寄る年波でしぼんだ人が着る衣服のだぶだぶの襷のように、壁の内側で街の縁に広がる迷路のようながらんとした通りを抜け出した。彼は草の生い茂るそのちよっとした高台に着いて、そこが前と同じように日当たりがよく人気のないのを知った。教会の扉では年老いた物乞いが、聖でもあり冒険でもある嘆願の言葉をつぶやいていた。しかしそれをのぞけば、静寂さは保たれていた。明るい陽光が街の壁の褐色の表面を暖めていて、エトルリアの丘の窪地を照らしていた。ロングヴィルは空いたベンチに腰をすえ、持ち運び用の画材をならべて絵筆を動かしはじめた。しばらくのあいだ彼は、何も邪魔するものはないという心地よい思いで、なめらかにすばやく絵筆を動かした。静寂の中で遠くの街の鐘が正午の時を打つのを聞いた時には、ほとんど邪魔とさえ思えたほどだった。この鐘の後まもなく、もう一つの邪魔が入った。柔らかな足音を聞いて、彼は目を上げた。若い女性がそこに立ち、上品な画家である彼に目を注いでいるのだ。もう一度見て彼は、この女性が、母親とともにもう一つの宿屋に入っていくのを彼が見たあの魅力的な娘であると確信した。どうやら彼女はその小さな教会から出てきたところらしかった。しかしながら彼は——どうしてだか私にはよく分からないが——、自分が彼女に

気づく前に彼女の方がしばらく彼を見ていた、と思った。彼女が彼のことをどう思ったかを尋ねるのは、おそらく失礼というものだろう。しかしロングヴィルは、ほんの一瞬のうちに、この若い女性について二、三の考えをまとめた。そのうちの一つは、彼女は美しい女性だがかなり大胆なようだ、というものだった。もう一つの考えは、彼女が——そう、明らかに——同国人だということだった。彼と目が合うや、ほとんどすぐに彼女は顔をそむけた。彼は一瞬躊躇したあとで帽子を上げようとしたが、ほとんどその時間はなかった。彼女自身もある躊躇を感じているらしかった。戻ろうという衝動を感じたかのように、彼女は教会の扉を振り返った。彼女はもう少し長くそこに立っていた。そのおかげで彼は、彼女が気安い振る舞いの女性であることがわかった。それから彼女は高台の手すり壁へとゆっくりと歩いていった。彼女はそこに立ち、両腕を高い石の柵にもたせかけ、背をロングヴィルに向けながらイタリアの田園風景を見つめていた。ロングヴィルはスケッチを続けたが、以前ほど集中してではなかった。この若い女性はそんなところで一人を何をしているのだろう、と彼は思った。そして彼女の連れの人——おそらく母親だろう——が教会にいるのだ、と思に至った。彼がここに着いた時には、二人の女性はずでに教会にいた。女性というものは教会で座るのが好きなのだ。彼女たちは中に半時間以上もいて、母親はまだ飽きない。しかし若い女性の方は、今はロングヴィルが描いている景色の方を好んだ。彼女は彼の絵の前景のまさに中心に立っている、と彼は気づいた。彼女の存在は絵をだめにしてしまうだろう、というのが彼のはじめの印象だった。次の印象は、彼女によって絵が良くなるだろうというものだった。少しずつ彼女は横を向いた。片腕だけを手すり壁にもたせかけ、もう一方の手はたんだ日傘を持って下に垂らしていた。彼女は身動きしなかった。絵に描いてもらうためにわざとそこに立っているかのようにだった。そうだ、たしかに彼女によって絵は良くなった。あだっばい帽子のくっきりとした陰の中で、繊細でほっそりした彼女の横顔は、空を背景にし

て際立って見えた。姿も軽やかで、やすやすと動いた。彼女は灰色の服を、当時の流行で体にきっちりと留め、深紅色のペティコートの幅広の縁をひらひらさせていた。彼女はその位置を保った。眺めに魅せられているように見えた。「ポーズを取っているのだろうか。私のためにモデルになっけてくれているのだろうか」ロングウィルは独りごとを言った。しかしこれはいらぬ考えだ、と彼は次に思った。なぜなら景色はそれ自体で眺めるのに十分すばらしく、美しい娘がすばらしい風景を愛することはごく自然なことだったからだ。「しかしポーズを取っていいよといまいと」と彼は続けた。「彼女をスケッチの中に入れよう。彼女がただ入り込んできたのだ。人間的な興味が加わるだろう。人間的な興味にまさるものはない」というわけで、持ち前の技術によって、彼は若い娘の姿を前景の中に描き加えた。そして十分後には、彼女の姿に似た人物をほとんど仕上げるところまできた。

「もう十分彼女が静かにしていってくれば、人物が絵になるのだが」不幸なことに若い女性には静かにしていられなかった。彼女は振り返り、ふたたびロングウィルの方を向いた。そして教会にふたたび入っていくかのよう、ゆっくりと戻っていった。こうするためには、彼女は彼のそばを通らなければならなかった。そして彼女が近づいた時、彼は本能的に立ち上がり、片手に絵を持った。彼女は彼をふたたび見たが、その表情は彼が数分前に「大胆」と心の中で形容したものであり、目は濃く知的だった。髪もブルネット^グで濃かった。彼女は人目を惹くほど美しかった。

「あなたに動かれて実に残念です」と彼は自信をもって英語で言った。「あなたはとても、とても美しかった」彼女は立ち止まり、これまでよりもしっかりと彼を見た。彼女が彼のスケッチの方を見たので、彼はその絵を彼女に差し出した。しかし彼女はスケッチをちらとしか見なかった。一方彼女がロングウィルの方に向けたまなざしには様々なものがこめられていた。彼女が顔を赤らめていたかどうかは彼にはわからなかった。彼女は怖かつ

たのかもしれない、と彼はあとになって考えた。しかしながらロングヴィルの言葉に対して彼女に返答をさせたのは、かならずしも恐怖のようには見えなかった。

「ありがとうございます。もう十分に私をご覧になったとお思ひになりませんの」

「とんでもありません。なんとしてでも絵を完成させたいのです」

「私はモデルが職業ではありません」とその若い女性は言った。

「そうです。それが私の困るところです」とロングヴィルは笑いながら答えた。「報酬をあげますと言えないのですから」

若い女性はこの冗談を趣味が悪いと思っているようだった。彼女は黙って顔をそむけた。しかし彼女の表情の中の何かに、その時その状況における彼の感情の何かに触発されて、ロングヴィルはさらにこの調子を進めた。彼はどうしても自分の希望を伝えたいと思ったのだ。

「まったくの善意ということになるでしょうが」と彼は続けた。「つまり単なる慈善の行為ですが。五分あれば十分です。私をイタリア人の物乞いだと思ってください」

彼女は彼のスケッチを置き、前へ進み出ていた。彼は指を組み合わせ、微笑みながら、お追従する態度でその場に立っていた。

彼の絵に入り込んできた女性は立ち止まって、まったく変な人だと思っているかのようにもう一度彼を見た。ただ、彼女は面白がっているようにも見えた。いずれにしても、今の彼女は怖がってはいなかった。少し彼をじらせてやろうと思っているようでさえあった。

「母のところへ行きたいんです」と彼女は言った。

「お母様はどこにいらっしゃるんですか」と若者は尋ねた。

「もちろん教会の中です。ここへ一人で来たわけではありません！」

「もちろんそうでしょうとも。ただ、お母様が大変満足されておられることはお分かりでしょう。あの小さな教会へは私も行ったことがあります。魅力的です。お母様はただそこで休んでおられるのです。おそらく疲れておられるでしょう。もしあなたがご親切にも私にもう五分間くださったら、お母様はあなたの方へ出てこられますよ」

「五分間ですか」若い娘は尋ねた。

「五分で十分です。永遠に感謝いたします」ロングヴィルはこう言いながら、自分自身に面白がっていた。もはやスケッチよりも、その言葉が意味するように思われることに、彼はとても関心を抱いた。どういうわけかは、この優雅な初対面の女性が、彼が提案したことをぜひともやってほしいと思ったのだ。

優雅な初対面の女性はもう一度スケッチに目を落とした。

「あなたの絵はそれほどすばらしいのですか」彼女は尋ねた。

「私には大変な才能があるのです」と彼は笑いながら答えた。「絵が完成すればご自分の目でお確かめください」

彼女はふたたびゆっくりと高台の方を向いた。

「確かに大変な才能がおりのようなね、自分のお願いを私にするように誘うという」そして彼女は前に立っていたところへと歩いていった。自分の望む姿勢を彼女に示そうとするかのように、ロングヴィルは彼女と一緒に行くとした。しかし彼女は、彼の画架をきっちりと指しながら言った。「五分間だけです」すぐさま彼は仕事

にもどった。そして彼女はあいまいにポーズを取ろうとした。「これでよければ言ってください」彼女はまもなくつけ加えた。

「まったく結構です」楽しそうな口調で彼女を見て絵筆を動かしながら、ロングヴィルは答えた。「これほどまでしていただいて、本当にお優しいことです」

しばらく返事をしなかったが、まもなく彼女は言った。「もちろんポーズを取るからには、上手にポーズを取りたいと思いますわ」

「見事なポーズです」とロングヴィルは言った。

この後彼女は何も言わなかった。数分の間、彼はいそがしく黙って描いた。彼はある興奮を感じた。そして彼の思考の動きは、絵筆の動きと歩調を合わせていた。彼女が見事にポーズを取ったことは本当だった。彼女は描くのふさわしい人物だった。彼女の美しさが、また彼がしばらく満足して眺めることになった彼女の大胆さが、彼に描く気を起こさせたのだ。彼は彼女について思いをめぐらせた。彼女は誰なのか。何をしているのか。そしてそのいわゆる大胆さにしても、俗っぽい厚かましさではなく、独創的でおそらく興味深い性格のあらわれだと考えた。彼女が完璧な女性であることは明らかだったが、彼女が例を見ないほど賢いこともまた明らかだった。ロングヴィルの小さな人物は成功だった。魅力的な成功だ、と最後の絵筆を加えながら彼は思った。そうこうしているうちに、モデルの連れの女性が現れた。彼女は教会から出て、しばらく立ち止まって高台の隅にいる娘から若い男へと目をやった。それから彼女は若い娘へとまっすぐに歩いていった。すばやく軽い足取りの、上品で小柄な婦人だった。

ロングヴィルの五分は過ぎた。それゆえ彼は持ち場を離れ、スケッチを手にして二人の女性に近づいていった。

娘の腕に手を差し入れていた年配の女性は、澄んだ驚きの目で彼を見上げた。魅力的な老婦人だった。目はとても美しく、見事な濃いまゆの^{ダーク}上には、銀色の髪がなかなかあだっぽく結ってある。

「私の肖像画ですよ」と娘は、ロングヴィルが近づいてくると言った。「この紳士が描いてくださいました」「あなたをスケッチしていたですって」母親はつぶやいた。「とても急なことじゃなくって」

「とっても急なの。まったく突然でした！」と若い娘は笑いながら叫んだ。

「こうした事情を考えると、とてもいい出来です」とロングヴィルは言い、絵を年配の婦人に差し出した。彼女はその絵を受け取り、しげしげと眺め始めた。「あなたにどれほど感謝しているか、とても申し上げられませんが」と彼はモデルに言った。

「今お礼をおっしゃるのはとても結構です」彼女は言った。「本当は始める権利などなかったんですから」

「衝動があまりに強かったので」

「衝動を抑えるべきですわ。それに私の許可を得るべきでした」

「あなたが拒否なさるだろうと思っていました。それにあなたはそこに、まさに私の視線上にお立ちになった」「そこから出るように私に頼むべきだったのです」

「それでは残念なことになったでしょう。それに、そんなことをすればひどく失礼だったでしょうし」

若い女性はしばらく彼を見た。「そうね、そう思います。でもあなたがされたことはもっと失礼でした」

「むずかしい事例ですね！」とロングヴィルは言った。「それでは、礼を失しないで私に何ができたのでしょうか」

「きれいな絵ね」と年配の婦人はつぶやき、ロングヴィルに絵を返した。一方娘は、その絵をちらとさえ見な

かった。

「私が立ち去るまで待つことだってできたでしょうに」議論の好きな若い女性は続けた。

ロングヴィルは首を振った。「私は機会は逃しません！」

「あとで私のスケッチを描くことだってできたでしょう。記憶を頼りに」

ロングヴィルは彼女を見て微笑んだ。「今では私の記憶がどれほど素晴らしいものになったか、ご判断ください！」

彼女も少し微笑んだが、すぐに真顔になった。「私としては、これは忘れようと努めるエピソードです。私は自分が演じた役割が好きではありません」

「どうかあなたがこれより似合わない役割を演じることがありませんように！」とロングヴィルは叫んだ。「少なくとも、お母様がこの場の思い出の品を受け取ってくださいることを願います」そして彼は、スケッチとともに彼女の連れの婦人の方を向いた。婦人は娘がこの積極的な見知らぬ男性と話すのを聞いていたが、頭がひどく混乱している様子で二人をかわるがわる見た。「私のスケッチをどうか受け取ってくださいませんか」彼は言った。「お嬢様に本当にそっくりだと思うのですが」

「まあ、ありがとうございます。とてもそんな」婦人は申し訳なさそうにつぶやいた。

「私がした勝手なふるまいに対する一種のつぐないとなるでしょう」ロングヴィルはつけ加えた。そして彼は画板から絵をはずしはじめた。

「その絵を私たちにくだされば、もっとひどいことになりますわ」と若い女性は言った。

「まあ、お前、ほんとにきれいな絵ですよ！」と母親は大きな声を出した。「まったくあなたそっくりです」

「だからよいひどいことになると思うの！」

ロングヴィルはとうとう苛々してきた。この若い女性のつむじ曲がりはおそらくかならずしも悪意のあるものではないだろう。ただ、無作法なのはたしかである。自分のことを美人のいじめっ子と見せたいと思っているようだ。

「どうしてよいひどいことになるのでしょうか」彼はしかめ面で尋ねた。

賢い女性だとは思ったが、たしかにそれを見せるつもりらしい。しかし彼女は、今度は答える前に少し考えた。「私たちにスケッチをくださるなんて」と彼女はとうとう言った。

「私が差し上げようとしたのは、お母様にでした」とロングヴィルは言った。しかし、苛立ちの結実であるこの言葉は、若い女性には何の効果ももたらさなかったらしい。

「その絵は、画家が習作スタディと呼ぶものではありませんの」彼女は続けた。「習作は画家本人にとって役に立つものです。手元にそのスケッチを取っておかれ、それがあなたの役に立ってこそ、あなたの立場の証明になりますか」

「娘は習作ということになるのでしょうか」と年配の婦人は、小さく軽い宥めるような声で言い、うやうやしくまたその絵を受け取った。

「言うことのつじつまが」とロングヴィルは言った。「まったく合っていなかったことは認めましょう。私への敬意というふうにしましょう」彼は母親の方を見て言った。

「お母様にですって」とモデルは言い、母親の手から腕をほどいて横を向いた。

母親は微笑んでスケッチを眺めていたが、その微笑みはこの場をうまく収めたいという切なる願いを表わして

いるように見えた。「本当にきれいな」と彼女はつぶやいた。「もしどうしても私にくださるとおっしゃるのでしたら」

「そうしてくだされば大変な名誉です」

「では分かりました。ありがたくだいておきます」彼女はちょっと若者を見た。一方娘は向こうに歩いていった。ロングヴィルは彼女のことを魅力的な人と思った。彼女は彼には、一種の変貌したクエーカー教徒、実際の面を持った神秘家と映った。「変な娘だとお思いでしょう」と彼女は言った。

「とてもお美しいですね」

「とても賢いんですの」と母親は言った。

「びっくりするほど奥ゆかしくて」

「まあ、でもいい子ですよ!」と老婦人は大きな声で言った。

「それはきつとお母さん譲りです」とロングヴィルは意味深長に言った。一方母親は、彼の挨拶に独特の几帳面上品さをもって返しながら、娘の後をいそいで追った。

ロングヴィルはその場にとどまり景色を眺めていたが、特に何かを見ていたわけでもなかった。ある機会を、楽しんだようにも逃したようにも感じたのだ。しばらくして彼は、教会の扉にあるぐらぐらする像のように麻痺して動かないといった様子で座っている物乞いの老婆をスケッチしようとした。しかし彼女の姿を描く試みは楽しいものではなく、彼は突然絵筆を置いた。彼女は美しくなかった。横顔がひどかったのだ。

第二章

二カ月後バーナード・ロングヴィルはヴェニスにいたが、依然としてイタリアを去ろうという気ではあった。彼は計画を立ててそれを守る人ではなかった。実際彼は計画を立てた。彼以上に立てる人はほとんどなかった。ただ彼はその計画を、変化の基礎として立てるのだ。彼は二週間過ごすつもりでヴェニスに行った。そしてその二週間は魅力的な八週間という形を取ったのだ。彼は自分の計画を実行しているという一種の確信を依然としてもっていた。なぜなら白状しておかなければならないが、愉しみに関与するかぎり、理論を実行に適合させるかかなりの技術が彼にはあったのだ。彼はヴェニスを存分に味わったが、抗いたい呼び出しによってその地から引き張りだされた。その呼び出しとは、ドイツに住む親しい友人ゴードン・ライトからの手紙だった。この友人は冬をドレスデンで過ごしていたが、手紙の日付はバーデン・バーデン^③になっていた。長い手紙ではないので、全文を引用しよう。

「ぜひともここへ来てほしいんだ。君はここに来たことがあるはずだから、ここがどんなに美しいか、どんなに楽しいところか分かるだろう。僕はたぶん夏の間じゅうここにいるだろう。僕の知り合いもいるし、君に会ってもらいたい人たちもいる。だからぜひ来てくれ。そうしたら君のイタリアのいろいろな思い出もありがたく聞かせてもらうよ。同じほどたくさんのは話できないよ。時間がいないんだ。僕が何をしているかご存知か。恋愛をしているんだ。実に興味の尽きない仕事だよ。これまで君に手紙を書かなかった理由は文字通りこれなんだ。五月の末以来ずっと恋愛をしているんだ。膨大な時間を食うんだ。他のことはみんな後回しになってしまった。こ

の実験自体が迅速に進んでいるなんて言うつもりはないが、前へ進ませようとはしているんだ。まだ実験の成功を試す機会はない。ただ、この点で君の助けがいるんだ。我々のような大物理学者は「助手」なしでは決して実験をしないんだ。科学の大義のために指をやけどし服を汚すが、課題についての興味は間接的であるにすぎない、つましい人間のとき。君に僕の助手になってもらいたいんだ。やけどしたり汚れたりしても危険ではないことは保障するよ。彼女は実に興味深い女性だ。本当に君にも彼女を見てほしいんだ。君が彼女をどう思うか知りたいんだ。君のことはたっぷり話してあるから、彼女も君に会いたがっている。自尊心が満たされたら来やすいというのなら、これでいいだろう。まじめな話だが、これは本物のお願いなんだ。君の意見、君の印象が知りたいんだ。彼女が君の目にどう映るか知りたいんだ。君の助言を求める、などとは言わない。助言なんて、もちろん君は与えようとはしないだろうから。ただ、僕のほしいのは定義や特性描写なんだ。君はそういうものがすぐにできるだろ。こういうことはすぐに君に言ったほうがいいと思うんだ。君にはいつも何でも言ってきたから僕は女性のことを分かっているなどというふりはしたことがないが、君は何でも知っていると僕はいつも思っていたよ。ほんとうに君はいつも全知の人らしい口調で話していたからな。だからここへすぐ来てくれ。そして君がベテン師じゃないことを示してくれ。とてもきれいな女性なんだ」

ロングヴィルはこの依頼をとてもおもしろいと思い、ただちにドイツに向かった。ゴードン・ライトの手紙は、おそらく読者には愉快よりは驚きの念を起こさせるだろう。しかしロングヴィルはこの手紙がまったくあの友人らしいと思った。手紙が特に示しているのは、ゴードンの想像力の欠如だった。この欠陥については、二人の若者の間でよく話題にした問題だった。二人にはそれぞれ認め合う奇癖の集合があり、それは相手の機知が活躍する場でもあった。バーナードはしばしば友人の想像力の欠如を底なしの穴と呼び、ゴードンはたびたび彼にそこ

まで降りてきてくれと頼むのだった。「おいおい」とバーナードは言った。「ほんとに勘弁してくれよ。そんな地中旅行なんてできないよ。息がつまってしまう。生きて出られないかもしれないし。ちょっとした冗談や比喩や、ちょっとした空想や逆説といったものを下に落としてみたが、それらが底に着いた音を聞いたことがない！」これは想像を生き生きと働かせる若者が言ったしゃれた喩えだったが、ゴードン・ライトが飛翔する知性というよりは着実に地を歩く知性をもっていることは本当だった。バーナードの目には、ゴードンの手紙のあらゆる言い回しが、底の固い丈夫な靴で行進しているように見えた。そして自分の愛する女性を科学的に分析する——幾何学的に調査する——ために友人に来てほしいと頼むことほど、物事を推論して解決するという過程にゴードンがいかに執着しているかを示しているものはなかった。「僕が意見をまとめるのに苦労するだろうとか、意見がまとまった時にそれを言うのに苦労するだろうとか、こういったことについて、僕が意見を言った時に彼自身がそれを受け入れるのに苦労するだろうということと同じくらいあいつはまったく考えていないんだ」とバーナードは、ミュンヘンに向かう列車に揺られながら思った。「ゴードンの精神には」と彼は続けた。「空気がない。彼の知性は真空の中を進むのだ。知性の進行に影響するような流れも渦もないし、強風も熱い陽光もない。季節や気温の変化もない。彼の前提は適切に配置され、その結論は完璧に計算できるものだ」

しかし、その性格についてあれほど自由に自分の機知を働かせた男に対して、バーナード・ロングウィルは強い愛情を感じていた。お互いに似ていないということは、友情の妥当性をおびやかすものではない。意見が合う土台はいるにちがいないが、その上に建てる構造物には千もの相違があるだろう。二人の若者は、大学時代から同盟関係を結んでいて、彼らの絆は、若い頃の感情的変革を生き延びたという単純な事実によって強められていたのだ。もっとも強い絆は、お互いに対する尊敬の念だった。彼らの好みや趣味は異なっていた。だが彼らは二

人とも、相手の性格に十分な敬意を持っていた。彼らは容易に愉しみを見出したと言ってもいいだろう。なぜなら彼らのどちらも何か顕著な活動といえるようなことをしていなかったのだから。彼らはたっぷりとした遺産と静かな運命を受け継ぎ、しかし黄金の機会の輝きにはなじみのない、非常に洗練された若いアメリカ人たちだった。もし彼らの名誉のために、私が彼らの祖国の体質をけなすことにためらいを覚えなければ、この若い紳士たちが名を揚げる機会がはっきり与えられることはなかった、と私は言うべきだろう。成人に達した時、彼らはそれぞれ十分な財産を相続し、激しい仕事をする必要はなかったのだ。実際ゴードン・ライトは大きな財産を相続した。彼らの欲求はますますつましいものだったので、若いアメリカ人たちに聞かれていたもっともはっきりした仕事であった、商業的に成功して富を築くという栄光をめざして努力しようという気に、彼らはならなかった。実際彼らは何の仕事にもつかなかった。そしてもし自分について何か語ってほしいと言われたら、おそらく彼らは人に感銘を与えるような話をするのはむずかしいと感じただろう。ゴードン・ライトは物理学に大に興味を持っており、いわゆる研究設備について自分なりの考えを持っていた。彼の考えは実際のな形を取り、いろいろな研究施設にまったく自由に金を分け与えた。その後ドイツで二、三年すごしたが、それはドイツを実験所の国だと考えたからだ。彼は現在もここにいて、いくつかの研究団体と交流し、難しい実験の費用を出しつつ、人知についての理解困難な様々な領域の研究を推進していた。その実験はしばしば彼自身が考案したものであり、世間の評価においてそのような研究にどのような才能が必要と言われようと、彼がその榮譽を得るべきである、とつけ加えておかなければならない。何についてもたやすく幻惑されることなどないバーナード・ロングヴィルの目にまぶしいと映ったのは、実はゴードンの才能ではなかった。バーナードが友人に対して好意を――一つの明確な理由を特定するのは難しいような好意を――抱いたのは、彼が相手を単純直接に見たからであっ

た。個人が感じる共感が何かの原因によって引き起こされることは疑いない。ただその原因は、天気の特定の状態の原因のごとく、我々の日々の視界からは遠く隔たり、不可思議なものである。我々は晴れるとか雨が降ると言つて満足する。我々の好悪の感情は、我々の分析の鋭さからその切れ味を借りるわけでは決してないのだ。ロングヴィルには上質なものを、極上の香りを好む心があつた。そして彼は、友人の素朴で率直で男らしく愛情に満ちた性質の中にこのような美点を見た。友人の性質はこの種のものとして卓越していると、ロングヴィルには思えたのだ。ゴードン・ライトには優しい心と強い意志があつた。この組み合わせは、理解力が限定されすぎない場合には、しばしば見事な活動をする動因となつた。ゴードンの理解力が限定されすぎないかという疑問が時折は起こつたかもしれないが、寛大になろうとする衝動は、不完全な想像力のすきまを埋めるのにしばしば有益な役割を果たした。そしてライトが概して人に与える印象は、知的であつて人がいいというものであつた。バーナード・ロングヴィルを評価する理由はもっと明瞭だつた。彼は根本的にも、そして皮相的にも人を喜ばせたのだ。自然は彼を、たつぷりの良い資質とともにこの世に送り出した。彼はハンサムだつた。背が高く、ブルネット^ダで、敏活で、申し分なく洗練されていた。馬鹿であつたとしても許されるようなハンサムだつたのだ。しかしすでに示されてきたように、彼は馬鹿とは程遠かつた。彼にはたくさん才能があつたが、その才能は、彼が大学を卒業してから三、四年の間に、法律の勉強という修練を受けていた。彼は法律を重んじはしなかつたが、自分の才能は大事に思つたのだ。彼はほとんど常に「教養がある」と言われた。どうして何かしないのか、と人は彼に尋ねた。この疑問は決して満足のいくようには答えられていない。つまりロングヴィルは多くの人よりその疑問を招くようなことをしていたからだ。さらに、彼が常に行っていることが一つあつた。愉しむということだ。これは明らかに職業ではなかつた。彼が世間に認められた職業のどれにも就く気がないとは、はじめから

言われていたことだった。しかし細部に立ち入ることなく彼は魅力的な男だった。賢く、あかぬけし、物惜しみしなかった。そして目立った外観として知られるような、あの幸運な資質を持っていたのだ。

第三章

ゴードン・ライトに手紙を書く際に、ロングヴィルはバーデン・バーデンに着く日をはっきりとは書かなかった。日を明記するという癖が彼になかったことは告白しておかなければならない。彼が旅程の最終地に着いたのは夜だった。そして友人が手紙を書いてきたそのホテルに着いたとき、彼はゴードン・ライトが、バーデン・バーデンの慣わしに従って、夕食後に談話館^{カンゼイション・ハウス}の敷地へ出かけたことを知らされた。八時だった。ロングヴィルは、旅の汚れを落とした後で、夕食の席に座った。ゴードンを呼びにやって夕食を一緒に取ろうとはじめは思ったが、思い直した彼は、夕食をできるだけ短いものにしようと思った。食事が終わり、彼は保養施設^{クルサール}へ向かった。このドイツの温泉場はヨーロッパでもっとも美しい僻地の一つであり、二十五年前の賭け事が行なわれる夏の夕べは、もっとも華やかな情景の一つであった。賭け事の殿堂（といってもそれは、ずっと清純な神聖さに捧げられているかのような慎み深い建物なのだが）の照らされた窓は、庭や木立に向かって開け放たれていた。シュヴァルツヴァルト^{フ・オ・レ・スト}の樹木の茂った山々から流れ出た小さな川が、小川特有の清浄な雰囲気を漂わせて、豪華なホテルや下宿屋のそばを流れていた。保養施設のテラスに建てられた背の高いテントにいるオーケストラが、紳士や淑女の談笑に控えめな演奏を添えていた。紳士淑女は、千もの小さな椅子のある広大な広がりにはらばって、コインの並べ替えや運の計算よりも自然の美しさをしばしのあいだ楽しんでいた。夏の夜空にかすかに光る星は、ぼん

やり見える黒い丘や森の上であって、その光をあえて彼らに当てようとはせず、無頓着な人々を見おろしていた。こうした光景を見ながら、ロングヴィルはまっすぐに賭博室へと向かった。実験の好きな友人がルーレットで組み合わせを試しているか、見たかったのだ。しかし友人は金びかの部屋のどこにも、黙ってテーブルに向かっている人々の中にも見つけられなかった。まもなくバーナードはランプの光に照らされたテラスに行き、そこをうろつきはじめた。そこでは無数のグループが、座ったりぶらついたたりしながら、その場所を巨大な懇話会カンパサワイガニにしていた。彼はそこを非常に心地よい愉しいところと思い、特に享樂的な人生観を持っていないと思われている男にしても、ゴードン・ライトはバーデンに来ることによって、きっと心地よい思いをしているにちがいない、と独り言を言った。会話をしている一つのグループから次のグループへとバーナードは進んでいき、とうとうある顔を見て足を止めた。彼は一瞬その顔を見て立っていた。以前に見たことのある顔だった。人の顔はよく覚えている方だったが、この顔が誰だったか思い出すまでにしばらくかかった。臆病そうに警戒し、鳩の翼のように白くて柔らかな髪を括っているこの小柄な年配の女性をどこで見たのだろうか。この疑問に対する答えはまもなく分かった。古いイタリアの町の草の茂った片隅でなくて何だろう。この女性は彼の不合理なモデルの母親だった。ということは謎の女性もおそらく遠くくないところにいるだろう。この推量を検証する前に、ロングヴィルの目はその老婦人の近くに座っている紳士の広い背中を見つけていた。その紳士は彼女に背を向けて、若い女性に話していた。彼が見たのはこの紳士の背中だったのだが、真の友情の本能によって、彼はこの特徴のない広い背中にゴードン・ライトの強壮な個性を見たのだ。ただちに彼は進み出て、ライトの肩に手をおいた。友人は振り返り、嬉しそうに叫びながら手を握って立ち上がった。

「やあ君だったか、バーナード！ 一体全体、いつ着いたんだ」

これに答えて少し説明しながらも、バーナードは、友人の善良な嬉しそうな顔から、ライトが話していた若い女性へ、そして反対側で明るい目を見開いてこちらを見ている女性へと視線を移していった。彼はその女性に対して、次に若い女性に対して帽子を挙げた。この若い女性については、彼はある失望感を意識した。とても美人だった。こちらを見てもいる。ただ彼女は、シエナの高台でのきごとのヒロインではなかった。

「いかにもロングヴィルらしいよ」ゴードン・ライトは続けた。「いつも後ろから近づいてくるんだ。人を驚かせるのが怖ろしく好きなやつだ」彼は笑っていた。大変喜んでいた。そしてバーナードを二人の女性に紹介した。「ヴィヴィアン夫人のことは知っているだろう。ブランシュ・エバーズさんのことも」

バーナードはこの小さな輪の中に入った。ヴィヴィアン夫人とは特別な面識があると敢えて言ったものか、ためらった。そして夫人の目が彼を認めたことにより、このことは言わないほうがいいらしい、という気に彼はなった。しかしヴィヴィアン夫人は特に何も言わなかった。彼女はあたりさわりのない話題——私は人がいつ到着するのか知りたいのです、不意を打たれるのは楽しくありませんから——を述べただけだった。

「しかしあなたはご自分なりに楽しめたのでは、と思うのですが」とロングヴィルは微笑みながら言った。こう言えば、シエナで小さな教会から出てきたら娘が見知らぬ画家にポーズを取っているのを見たあの時のことを思い出すのではないか、と彼は思った。

しかしヴィヴィアン夫人は顔を優しくこちらに向けて、深みのない返事をしただけだった。

「あら、私は良いことでも悪いことでも自分の分を味わっただけです。何かに不満を言っているわけではありません」そして彼女はちょっとと非難するような笑い声をあげた。

ゴードン・ライトはふたたびバーナードと握手した。バーナードに会って本当に実に嬉しうだった。自分は

「恋愛をしている」とゴードンが書いてきたことを思い出して、ロングヴィルはゴードンの顔に情熱の猛威による荒廃が見られるか探しはじめた。しかしさしあたってはそのような荒廃は見られなかった。正直で優れた友は穏やかで満ち足りた顔をしていた。ゴードン・ライトは澄んだ灰色の目をしていて、髪は短くまっすぐに亜麻色で、健康さが発散していた。造作の一つひとつは太くふぞろいだったが、容貌全体は、その表情の長所に加えて、力強い黄色っぽい口髭——彼はそれを時々勇ましくひねった——からある種の上品さを引き出していた。ゴードン・ライトは背が高くはなかったが、遅しかった。そして体全体に何かしつかり根を張った頑強さといったものがあつた。彼はほとんどいつも明るい色の服を着ていて、首にはいつも青いネクタイを締めていた。興奮した時には非常に赤くなつた。彼はロングヴィルに旅行や健康や滞在地や予定を尋ねたが、それに答へつつロングヴィルは、ライトの目の中に彼の今の状況を語るものはないか読み取ろうとしていた。彼の横にいるあの美しい娘は、彼の愛情の不可解な対象なのだろうか。その場合、老婦人の機能は何なのか。そしてあの議論好きな娘はどうなつたのか。たぶん彼女はもう一人の娘、妹だろう。もっとも彼女はロングヴィルの友人たちのどの人にも似ていないが。バーナードが尋ねるような視線を送っているのに、ゴードン・ライトは内心を目で伝えることはしなかった。語るべきことがたくさんありすぎるのだろう。彼らだけになるまで、自分の話はとっておくつもりなのだろう。今彼らだけになることはできなかった。二人の女性はゴードンの庇護下にあるのだから。ヴィヴィアン夫人——彼女の名前を知ってバーナードは満足した。半ばまで引き上げられて何かにひっかかった幕が、突然すべて引き上げられたようだった——は、穏やかに期待するといった様子で、座ってテラスのあちこちを見回し、ぶらついている人や話している人を見ていた。おそらく上の娘を捜しているのだろう。ロングヴィルは、こちらの若い女性もやってきてほしいと願わずにはおれなかった。その一方彼は、ゴードンが熱愛してきた若い女性が非常

に美しいと思ったが、また彼女はとても親しみやすいようにも見えた。ロングヴィルは彼女と少し話したが、もし彼女が、ゴードンが彼に書いてきたその人物であるとしたら、彼女に興味を持っているように見えることも自分には必要なのではないか、とも思った。このような状況判断は、ゴードン・ライトがまもなくヴィヴィアン夫人と話すためにむこうを向き、その結果ロングヴィルは彼女と知り合いになる自由が与えられたことによって追認された。

彼女がシエナで他の人たちと一緒にではなかったとしても、彼女と会ったのはこれが初めてではない、ともロングヴィルには思えた。要するに彼女は、彼が千度も見てきた美しいアメリカ娘だった。無数の姉妹のようなもので、一族の強い類型を帯びているのだ。この若い女性は（ゴードンのネクタイの色の）魅力的な目をしていて、その目は一度にあらゆるところを見ているとはいえ、ある場所には少し留まった。そしてロングヴィルの目はしばしばそのような場所で彼女の目と出会ったのだ。彼女の髪は柔らかい褐色で、絹のような黄金の糸が見えた。その髪は美しく整えられて、パリ風の洒落た小さな帽子が乗っていた。彼女はまたほっそりした小柄な体つきで、手はきれいな洗練された上品な手であり、かわいらしい手袋をしていた。彼女は座りながら大いに動いた。小柄で柔軟な体をねじったり、髪を指でいじったり、服の装飾品を点検したりした。ロングヴィルはすぐに分かったのだが、彼女は大変な話好きで、自分の意見を実に正直にきっぱりと語った。まずはじめに彼は、バーデンには長くおられるのですか、と尋ねた。しかし彼女が必要としていたのは、この質問というはずみだけだった。魅力的で意識的、そしてあだっぽい小さな顔を彼女の方に向けながら、彼女はただちにおしゃべりをはじめた。

「ここには四週間おりますの。あなたがそれを長いとおっしゃるかどうかは分かりませんが、私には長いとは思えません。大変愉しく過ごしましたわ。ここでは存じ上げているたくさんの方にお会いしました。毎日どなた

かが現れるのです。今日はあなたが現れました」

「ああ、でもあなたは私をご存知ない」とロングヴィルは笑いながら言った。

「でも、あなたについては実にたくさんお聞きしましたわ！」とその若い女性は、矛盾することをかわいらしく目を少し見開いて叫んだ。「私の親友の、ボルティモアのエラ・マクレインさんのことはご存知でしょう。今ヨーロッパを旅行されておられますの」ロングヴィルはすぐには思い出せずこの言葉にうまく応えられなかったが、この場合にふさわしいように大喜びで認めはした。さらに彼は、ボルティモア出身のその若い女性は大変美しいとさえ言ってみた。「彼女はまったくかわいらしい人です」と相手は言った。「彼女があなたのお話をするのをたびたび聞きました。あなたは彼女のことよりそのお姉さんのことをよくご存知ではありませんか。お姉さんはそれほど長くは外に出ておられません。まったく興味深い人です。ノルウェーを旅行されています。考えられる限りのどこへでも行っておいでです。フィンランドで終わりにしようとしています。それ以上遠くへはいけませんでしょう。それでほっとさせられます。向きを変えて戻ってこざるをえないでしょう。彼女にどうしてもバーデン・バーデンに来てほしいのです」

「来てくださるといいですね」とロングヴィルは言った。「お一人で旅行されておられるのですか」

「まあ、とんでもない。イギリスの方を見つけられました。その方はエラにぞっこんですって。この頃では皆さんイギリスの方を連れておいでのようね。ここにもお一人おいでです。ラブロック大尉、オーガスタス・ラブロック閣下です。こういう方々は怖ろしく美男子です。エラ・マクレインはぜひともバーデン・バーデンに来たがっています。あなたに彼女に宛てて手紙を書いていただきたいの。彼女のお父様もお母様もあるお考えがおありなんです。不適切とか、どう言ったらいいんでしょうか、不道德と思っておられるのです。あなたにぜひ手紙

を書いていただいて、彼女にそんなことはないと言っていたきたいの。ヴィヴィアン夫人が不道德な場所へ来ようと思うなどと、あの人たちは本当に思っているのでしょうか。ヴィヴィアン夫人はただちに彼女の世話をするでしょう。何人お世話しようとかまわないうですから。ただただ親切なんです。私もヴィヴィアン夫人のお世話になっていることがお分かりでしょう。母はマリエンバード^④へ行っています。母はヴィヴィアン夫人の影響をとても評価していますから、夫人とだったら私にどこへでも行かせてくれるでしょう。夫人の影響についてはいつも聞いてきました。あなたもでしょう。すばらしいと思いますわ。私に見事な影響を与えてくださいました。自分を褒めたいとは思いませんが、影響はすばらしかったです。私が良くなかったかどうか、ヴィヴィアン夫人にお聞きになってください。ただただ自分にできるだけ良くふるまってきましたわ。まったくおとなしくしてきました。ここにこのようにただ座っていたのです。ここを不道德だと言いになりますの。したくなければ賭け事はしなくてもいいのです。エラ・マクレインのお父さんはあなたが引き込まれるだろうと思っておられるようです。私は自分が引き込まれていないという自信があります。あなたがどうおっしゃるか分かりますわ。私は引き出された、とおっしゃるつもりでしょう。そうね、今夜はそうすわ。私たちはただここにおとなしく座っているだけで、お話をする以外にすることはありません。自分たちだけでちょっとした集まりをしているわけです。あなたも私たちの集まりに加わられますか。お二人今はおられません。ヴィヴィアンさんとラブロック大尉です。ラブロック大尉は、賭け事について説明するために、彼女といろいろな部屋をまわっておられます。ヴィヴィアンさんはいつも何についても説明をお求めになるんですの。私ははじめて賭け事のテーブルを見たときに自分が理解したと思っています。ヴィヴィアンさんにお会いになりました。大変称賛されておられます。まったくび抜けておられますの。ブルネット^{ブラック・ヘア}の方はめったにおられません。あなたもその髪ですわね。でも、若い

女性では、という意味ですのよ。ここでは何でも見られますわ。テーブルに來られる人で、ポルトガルの伯爵夫人ですけど、その方の髪はほんとに青いんです。そこまでの色になると、お褒めしたいとは言えませんか。青は好きな色ですけど、目の色の方がいいですわ」とロングヴィルの相手は、その色の二つの輝かしい見本を彼女の方に向けながら話し続けた。

彼はいかにも愉しそうな表情で聞いていた。その表情は、非常な敬意を常に示しているわけではなかった。ただその嬉しそうな表情は、敬意を受けないというわけではない美しいおしゃべりたちが、しばしば男性の無関心よりは好ましいと思うようなものであった。そしてこれを聞きながらバーナードは、いつもの癖でいろいろと考えをめぐらせていた。美しい娘には二種類ある、鋭い意識を持っている娘と見事に無意識な娘だ、と彼は独り言を言った。ヴィヴィアン夫人が世話をしている娘は前者のカテゴリーに入り、その中のあだっぽい属というわけだ。我々は皆、必要不可欠なものについて自分なりの考えがある。そしてこの若い女性にとって必要不可欠なものは観客だった。二足動物の男ならほとんど誰でも、この目的に叶うだろう。この観客に対して、彼女はさしあたり自分の存在のすべてを投げかけた。視線や態度や感嘆の声によって、また口調やしぐさや姿勢について百もの小さな実験をすることによって投げかけたのだ。そしてこうした活発な工夫はあまりに無邪気で明白なものだったので、観察者とうまくやりたいという彼女の願望の直接さはそれ自体で美質となったのだ。その人にとって存在がちらちら光る表面にすぎないような幼い娘たちの天性のつとめや仕事は、おしゃべりをし美しい服で着飾ることだ、とバーナードはのちに思わず独り言を言った。人生やそのつとめについての彼女たちの見方は東洋の踊り子の方のように単純で皮相的だった。ゴードン・ライトが助言を求めたのはこのような透きとおるほど分かりやすい浮気娘についてのはずはない。娘の向こう側に日の光が、いやバーデンのガス燈の光が文字通り見えて

しまいそうだ。彼女はしばらくそこに座り空虚な頭をあちこちに向けていた。そして動くたびにバーナードの視線をとらえた。今は話題が尽きてしまった様子であった。ちょうどその時、かたわらに紳士を連れだ若い女性がこの小さな集まりに近寄ってきた。ロングウィルは彼女を見るとすぐに椅子から立ち上がった。

「無意識のグルーブの美人だ!」、と彼は独り言を言った。彼女の顔はよく知っていた。半時間その顔を描いていたのだから。

「ヴィヴィアンさんだ!」、とゴードン・ライトも、娘のために母親の近くに場所を作るかのように、立ち上がりながら言った。

彼女は少し微笑みながら立ち止まった。それからロングウィルに目を留めた。彼らははじめ正面から直接に見つめあったが、その視線はただ上品な好奇心を表わしているにすぎなかった。しかしそのすぐ後に、見覚えがあるという視線になった。見覚えにうろたえ、それが顔の赤らみとなって現れた。

ヴィヴィアン嬢の連れは力強い美男子で、立派な赤褐色のあご鬚をしており、身なりが非常によいことは見ればすぐに分かった。彼は、バラの花をボタン穴に飾った短い上着のポケットに手を入れていた。彼はブランシュ・エバーズに近づき、微笑みながら体を軽く動かし、彼女に向かっておどけたお辞儀を二、三度した。

「おや、テーブルにお置きになったお金を全部お負けになったのですね!」と若い女性は彼のお辞儀に応えながら言った。

彼は笑ってお辞儀を繰り返しはじめた。

「どんなに負けてもかまいません。ただ、ただ」

「ただ、何ですの」

「ただあなたのそばに座るのをお許しくださいませ！」そして彼は、彼女の向かい側の椅子に非常に慇懃に座った。

「全財産をお付けになればいいのに！」と彼女はバーナードをちらりと見ながら言った。

「ちょっとした額でしょうね」とラブロック大尉は言った。「私がみじめになるところを本当にごらんになりたいのですか」

この上品な会話が交わされているあいだ、ヴィヴィアン嬢はロングヴィルの顔から目をそらして母親の方を向いた。しかしゴードン・ライトが、ロングヴィルの肩に手を置き、友人を紹介しようと前に進み出て、彼女の動きをさえぎった。

「こちらの多芸な人物がバーナード・ロングヴィル氏です。彼について僕が話すのはお聞きになっているでしょう。彼の特技の一つは、月から降りてくることです」

「いや僕は月から降りてくるなんてことはしませんよ」とバーナードは笑いながら言った。「僕は、シエナから降りてくるのです！」彼はヴィヴィアン嬢に手を差し出した。しかし彼女は、明らかに一瞬、自分の手を差し出すのをためらった。そのあと彼女は彼の挨拶に応じたが、彼がシエナについてほめかしたことは何の反応も見せなかった。

彼女は座るのを断わり、疲れているので休みたいと言った。彼女の母はこの言葉にすぐに応じた。そしてこの母娘はエバーズ嬢に頼み、彼女はラブロック大尉との会話を諦めなくてはならなくなった。しかし彼女はこの楽しみを、ヴィヴィアン夫人の滞在するホテルへ向かう道々享受した。そのホテルへは、いかにも社交的なバーデン流のやり方で、皆ゆつくりと歩いていったのである。ロングヴィルは自然ヴィヴィアン嬢の隣を歩くことにな

るだろうと思っていたが、彼女が自分を避けたという印象を受けた。彼女は前を歩き、ゴードン・ライトが彼女の横を歩いた。もっとも、この二人はほんの二、三語しか言葉を交わさないようにロングヴィルには見えた。彼自身はヴィヴィアン夫人に腕を差し出した。夫人はわずかにふらつく足取りで歩き、バーデンの美しさやそれぞれのホテルの良いところについて意見を述べていた。

(続く)

註

① シエナ イタリア中部トスカナ地方にある城壁に囲まれた都市。十三―十四世紀の芸術の中心地。この都市についてジェイムズは、一八七四年六月に旅行記を『アトランティック・マンスリー』誌に発表している。この旅行記は、書き加えられて一九〇九年出版の『イタリア印象記』(Italian Hours)の一章「シエナ今昔」(“Siena Early and Late”)となった。この章の冒頭近くには、『信賴』の冒頭を思わせる次のような文が見られる。

シエナの大広場は有名だが、写真が増殖し、驚きは無感動に変わり、啓示が汚される現代において、世界の驚異のどれひとつとして、ワーズワースの詩にある歓喜の幽霊のように、私を「驚かせ待ち伏せ」するふりができるものはない。しかし暗い珥道の下から私を待っている情景の中に足を踏み入れた時には、私には示された貴重な感受性の鋭さを失ってしまったという意識はなかった。

私の到着を待っている情景と言ったものは、浅い馬蹄形をしており、この地を旅したことのない人でも、この街を訪れた友人たちの画集を繰ってみれば敬意を持って思い出すことができるだろう。もっと良い言い方をすれば、その場所は、プッブリコ宮殿の高くて広々とした正面が弦をなし、その他のすべての建物が弧であるような、一種の弓形になっているのだ。そこには私が今年中に会わねばならない人間などいるわけもなかった。それゆえ私は、月光に助けられて、中世のイタリアの悠久の情景を半時間ほど楽しんだのだ。

② 広場はカンポ広場 (Piazza del Campo)。馬蹄形なのは、中世に九人の議員が政治を司っていたために、九つに分けら

れたため。宮殿は、十三世紀末から十四世紀にかけて建設されたゴシック様式のプブリコ宮殿 (Palazzo Pubblico)。十四世紀半ばに造られたマンジャの塔 (Torre del Mangia) が異彩を放し。

③ バーデン・バーデン (Baden-Baden) ドイツ南西部にあるローマ時代以来の温泉保養地。十九世紀には王侯貴族の避暑地であり、華やかな社交が繰り広げられた。

④ マリエンバード (Marienbad) チェコの都市。

解 説

一八七九年に出版された本書『信頼』(Confidence) は、ヘンリー・ジェイムズがその長い創作活動の初期に書いた長篇小説である。しかしこの時期に書かれた『アメリカ人』(七七年)、『デ이지ー・ミラー』(七八年)、『ある婦人の肖像』(八一年)などに比べて、『信頼』はほとんど黙殺されてきたといっても過言ではあるまい。若者が様々な挫折を味わいながら、恋愛や人生の選択について真剣に苦悩する姿を描く小説をかりに青春文学と呼ぶなら、『信頼』はその対極にあるといえよう。有閑階級の男女が織りなす恋愛遊戯を悠然と描いた、まことに不真面目な保養地文学、観光地文学とも読める小説なのである。そして遊戯性が強く出すぎたために、この時期のジェイムズの他の作品ほど読者に愛されなかったことは想像に難くない。

とはいえ『信頼』には、ジェイムズ初期のものとしてはあなどれない技巧がちりばめられていることも無視できない事実である。たとえば冒頭部分においてジェイムズは、後の『使者たち』を彷彿とさせるような描写の冴

えを見せている。イタリアの古都シエナに滞在する主人公バーナード・ロングヴィルが街のはずれで風景を描きはじめた時、絶妙のタイミングで女性が登場し、バーナードが描く絵の構図の中心に位置するところで立ち止まる。彼はさっそく絵の中にこの女性を描き込みはじめる。……読者はこうして、現実には女性が登場するプロセスと、バーナードの絵が描かれるプロセスと、そして彼の頭の中でロマンティックな願望が実現されていくプロセスという三つが同時に並行して進展していく過程につきあうことになる。

小説の視点はバーナード・ロングヴィルに固定されている。そして知的優位に立つと自負する彼のもくろみが女性にまんまと裏をかかれるという展開が、この小説の読みどころである。冒頭の風景画の場面においても、またその後のいくつかの場面においても、謎の女性アンジェラ・ヴィヴィアンは、男に観察され男の勝手な願望を満足させる存在、という自分に与えられた役割が気に入らない。一方バーナードは、自分たちが織りなす男女の恋愛模様を劇に見立て、自分がその劇の登場人物兼演出家であると自負している。こうした自信たっぷりの男の身勝手なシナリオを逆手にとって、アンジェラはその裏をかくのである。（男たちが自分にかぶせようとする解釈に、したたかにそしてそれなりに真剣に抗しようとしている点で、『信頼』のアンジェラは「デ이지ー・ミラー」のヒロインと近い位置にいる、と私は解釈している。）主人公バーナードの立場に立てば、タイトルのConfidenceが示すごとく、彼の「自信」はアンジェラによって揺さぶりをかけられる。（肯定的なタイトルが小説の展開とともにやがて皮肉な意味を帯びるのは、ジェイムズの読者にはおなじみの展開である。）彼が「信頼」すべき相手ははたして誰なのか、誰に自分の本心を「告白」すればよいのか。読者は小説の心地よいユーモラスな進行とともに、主人公の謎解きにつきあうのだ。

『信頼』は、ジェイムズの長篇の中で原稿がすべて残っている唯一の小説である。また、その着想がジェイム

ズのいわゆる『創作ノート』(Notebooks)の冒頭を飾る小説としてよく知られている。この長篇は一八七九年八月から八〇年一月にかけて雑誌 *Scribner's Monthly* に連載された。単行本としては七九年十二月にイギリス初版が、八〇年二月にアメリカ初版が出版されている。その後いわゆるニューヨーク版撰集に選ばなかったため、『信頼』は後期のジェイムズによる大幅な加筆は受けていない。しかしこの小説は、連載版から単行本化される際に加筆を受けており、イギリス版とアメリカ版も互いかなりの相違を見せている。(イギリス版が三十一章、アメリカ版が三十章と、章立ても異なっている。)ここに訳出するにあたっては、The Library of America 版が採用している一八八〇年二月出版のアメリカ初版を使った。それはこの版が、ジェイムズ自身が再版を許可した版であり、原稿や連載の版にもっとも近い版であるという理由による。このテキストは、初期のジェイムズのアメリカ的な文体の特徴をよく表わしている。「〜は……と言った」といった単調な会話の繰り返しも、後期のジェイムズ作品には見られないその単調さを示すために、敢えてそのまま訳出した。また特に注意すべきと思われる表現には、「絵のよう^{ピクチャレスク}な」や「ブルネッ^グト」のようにルビを振った。